

新型コロナウイルス禍で学ぶ

代々木ゼミナール教育総合研究所
シニアコンサルタント 工藤 優彦

2020年1月半ばに日本国内で初めて確認された新型コロナウイルスへの感染はその後徐々に拡大して、2月末には全国の小・中・高校等が一斉臨時休業となりました。感染は3月下旬からさらに急速に拡大して、学校の一斉休業の延長や緊急事態宣言へと発展し、社会全体に影響を及ぼしています。感染は半年～2年もの間終息しないという見解もあり、終わりの見えない日々が続いています。

新型コロナウイルスの全国的な感染拡大により、日本社会の色々な面で大きな変化が生じてきています。最も深刻な影響を受けているのはもちろん医療体制ですが、日々の生活を支える経済、生活を豊かにする文化やスポーツにも大きな支障が生じています。さらに個人の行動規制が強まるとともに、その影響はひとりひとりの身体と心にまで浸潤してきています。人間社会の基本・前提ともいうべき「関係性」が感染拡大の最大の要因となっていることが、その背景にあります。接触機会の8割削減は、これまでは当たり前となっていた社会関係の断絶・拒否を求めることに他なりません。社会的存在である人間の存立が、根底から揺さぶられています。今回の新型コロナウイルス禍が最終的にどのような結果を世界にもたらすのかはいまだわからないものの、感染拡大そのものはいつか終息を迎えることになるでしょう。大きく傷ついた社会も、徐々に息を吹き返すに違いないと今は強く希望しています。

今回の新型コロナウイルス禍は、極めて特異な出来事です。その特徴は、まず全世界的な出来事である点にあります。また、これまで経験したことがないほど社会全体に影響を及ぼした出来事でもあります。したがって、それは文字通り歴史的な出来事となるでしょう。これほど重大な出来事であると同時に、すべての国民にとってこれほど身近に感じられた出来事もないでしょう。だからこそ、この出来事はこれからの世界の在り方に大きな変化を及ぼす可能性が大きいのです。それゆえ、私たちはこの禍を将来に向けて役立つ出来事とする必要と責任があるのではないのでしょうか。

この間の事情は大人だけのことでなく、子どもたちにとっても同じです。というよりも、将来を担う子どもたちこそ、ここから何をどれだけ学ぶことができるかが重要ではないのでしょうか。そのような観点から、いくつかの提案をしてみたいと思います。

子どもたちが学ぶ歴史の教科書を開けば、それこそ「歴史的な出来事」は数限りなく記されています。私たち人間が歴史を学ぶ意義は、これまでも様々に語られてきました。歴史を学ぶことを無意味だという人はほとんどいないでしょう。では、私たちはこれまで歴史から何を学んできたのでしょうか。この質問に対する皆さんの答えは一樣ではありません。では、私たちは歴史から「それぞれに」学べばよいので

しょうか。

評論家である小林秀雄は、歴史を学ぶことについて、学生に向かって次のように語っていました。¹

今の歴史というのは、正しく調べることになってしまった。いけないことです。そうではないのです。歴史は上手に『思い出す』ことなのです。…歴史を知るといのは、みな現在のことです。…古いものはまったく存在しないのですから、諸君はそれを思い出さなければならない。思い出せば諸君の心の中にそれが蘇ってくる。…歴史をやるのはみんな諸君の今の心の働きなのです。…『歴史はすべて現代史である』とクロウチェが言った…歴史をよく知るといことは、諸君が自分自身をよく知るといことと全く同じことなのです。

小林は、「歴史の知識」に偏りがちな歴史観に対して「歴史の経験」を主張しています。過去の出来事や人々の姿を現在の私たちがありありと実感できること。実感している自分を見出すことで、歴史的な出来事を現在のこととして蘇らせることができること。そのような経験を通して自分を見つめ直すことこそが、歴史を学ぶことだということです。

このように歴史を経験することが歴史を学ぶことだとするならば、教科書に出てくるすべての出来事について同様に学ぶことは物理的に不可能です。いくつかの出来事を通して歴史を経験できれば良い方でしょう。ですから、「何から学ぶか」は人それぞれで違ってくるでしょう。しかし「何を学ぶか」については、「歴史の経験」という点で共有できるはずで

数年後の歴史の教科書には、「2019年12月、中国で感染が確認された新型コロナウイルスは数か月後には世界中に広まり、約〇〇〇万人の感染者と約〇〇万人の死者を生じた。これによって、世界の経済は大きな打撃を受け、これをきっかけに…」といった記述が掲載されるでしょう。それはすべての子どもたちにとって、これまで教科書で目にしてきた「歴史の知識」と同じものではないはずで

実はこの「身近さ」は、新たに始まる大学入学共通テストでも重要なキーワードになっています。「生きる力」の育成を目標とする現行の学習指導要領に対応して、共通テストでは日常性や社会性を意識した作問が行われます。これまで実施された試行調査の問題でも、多くの科目で日常的な場面や話題にもとづいた問題が出題されています。「身近さ」はこのようにこれからの大学入試の重要なポイントとなるばかりではなく、子どもたちの学習の質を高める意味でも重要なポイントにもなります。

学習には、動機が必要となります。学習者から見て動機がどのような位置にあるかによって、動機づけ

¹ 国民文化研究所・新潮社編「小林秀雄講義 学生との対話」(新潮文庫) 2017

は「外発的な動機づけ」と「内発的な動機づけ」に分けてみる事ができます。「外発的な動機づけ」は、学習者が価値を認める何らかの報酬などによって、学習者の外部から動機づけられることを指します。一方「内発的動機づけ」とは、そもそも行動は人間の内的な原因によって触発されるものであるとする考え方にもとづくものです。この内的な原因を動因と呼びますが、動因には生命を維持するために必要な行動を起こす生理的動因と、成長とともに社会的な関係を築こうとする2次的動因があります。

この外発的と内発的の区分は、必ずしも明確なものではありません。同じ要因であってもその要因をどのように受けとめるかは人によって異なり、その受けとめ方＝「自己決定権（自律性）」の度合いによって、外発的な動機づけでも内発的な動機づけに極めて近いものもあるからです。

動機づけの関係を、学習の面から「学習内容と学習目標との関連性」と「学習の功利性」という2つの軸で分類したのが、教育心理学者の市川伸一です。² 市川は「内発・外発」という従来の分類をこの新たな二軸でとらえ直し、「学習動機の2要因モデル」として提案しました。下図にあるように、この2軸によって6つの学習動機が分類されますが、これをさらに学習内容と学習目標の関連性が高い上段の「内容関与的動機（充実・訓練・実用志向）」と、その関連性が低い下段の「内容分離的動機（関係・自尊・報酬志向）」に分けて考える事ができます。ここで「内発・外発」との関係は、左上にいくほど内発的であり、右下にいくほど外発的となります。



学習は自発的・主体的なものほど質的に高く、継続性も高いといえますが、この図でいえば①～③の方が、④～⑥よりも自発的・主体的な動機づけとなります。ここで、「③実用志向」が「身近さ」に関係します。つまり、学習課題が「身近」に感じられると、自発的・主体的な学習の動機づけになりうるということです。指導者が学習課題を生徒にとって身近なものに感じさせることができるかどうかで、生徒の学習への取り組み姿勢が変わるのです。この観点からも、今回の新型コロナウイルス禍を教材に取り上げることは、生徒の学習の質を高める可能性があると考えられます。

「歴史」と「動機づけ」の観点から、教材として新型コロナウイルス禍を取り上げる利点を見てきまし

² 市川伸一「勉強法の科学—心理学から学習を探る」(岩波科学ライブラリー) 2013

たが、その可能性はこれにとどまりません。

「全世界的」という特徴は、今日の「グローバル化」を背景にしています。50年前であれば中国の地方の風土病で終わった可能性が高いこの感染症がまたたく間に全世界に広がり、パンデミックにまで進展したのは、人の流れがグローバル化した結果です。また、世界が同時に急激な景気後退を余儀なくされているのも、経済のグローバル化のマイナス面です。現代社会を理解する上でひとつの重要なキーワードが「グローバル化」ですが、今回の出来事はこの「グローバル化」を見る枠組みを大きく広げるものとなるのではないのでしょうか。さらに今回の事態に対する各国国民の対応を比べると、民主主義やその背後にある基本的な価値観についての考え方の違いも見えてきます。この面からの活用も可能でしょう。

新型コロナウイルス禍が教えてくれたものは、このような人文・社会の側面だけではありません。

生物の観点からは、生物とも非生物とも断定できないウイルスという不思議な存在は「生命とは何か」という根源的な問いにつながりますし、そもそも「免疫」という学習分野とも直接関係しています。

数学も、今回クローズアップされた話題と関係しています。「8割おじさん」で有名となった北大の西浦教授は、数理モデルで感染規模の推移を予測する（数学で近未来を予測する）ことが可能であることを国民に強く印象づけました。数学や統計をこれほど身近で有用な存在に感じることができる例は、あまりないでしょう。

今回の新型コロナウイルス禍が学校教育に及ぼした影響は非常に大きく、また長期にわたります。学校再開後は、当面は活動の正常化に多くのエネルギーが費やされることになると思われます。「遅れをいかに取り戻すか」「学校生活をいかに正常化するか」が最大の課題でしょう。しかしその一方で、上記のとおり今回の新型コロナウイルス禍は他にないほど多様で深い学習の契機ともなりえます。「生きる力」「深い学び」の絶好の機会として、鮮度があるうちに各教科で工夫してみるのはいかがでしょう。

(おわり)